

鳥山純子著（春風社 2022年）
『「私らしさ」の民族誌 現代エジプトの女性、格差、欲望』

齋藤剛*

大変な労作にして傑作。そんな言葉が思い浮かぶ。本書は、学部生時代に偶然訪れたパレスチナで「出会った人びとに思いがけず心を奪われ」、大学卒業後、「中東を知りたいから現地で暮らす、という目的意識」[鳥山 2021: 18]のもと、エジプトで10年暮らした鳥山純子氏の手になる記念碑的労作である。

鳥山氏は現地でエジプト人男性と結婚し、(元)夫の大家族とカイロで過ごしながら二人の子供の出産、子育てをしつつ、調査を進めた。鳥山氏が型破りのフィールドワーカーであること、本書が傑出した民族誌であることの土台には、一調査者としてだけでなく、エジプトの庶民の只中で妻、母、義理の娘／息子の嫁として長期にわたって暮らし、幅広い視野で、かつ生活に密着した視点からエジプトに生きる人についての理解を深めようと模索し、格闘し続けてきた生活経験がある。

2015年にお茶の水女子大学に提出された博士論文をもとにしつつ、それを大幅に書き直した本書が対象としているのは、カイロにある私立学校Aで勤務する3名の女性教員(うち1名は校長)と、同校で同じく教員として勤務した鳥山氏である。「私らしさ」が本書を貫く鍵概念であるが、本書は『「私らしさ」の民族誌』であるだけでなく、「顔が見えない」研究の問題点を乗り越えることを企図した「人の民族誌」でもある[17, 30, 389-393]。中東に生きる人々に心を奪われ、中東に生きる人々のことを知るために現地にどっぷりと浸かって暮らした鳥山氏であれば、「テーマや出来事やトピックではなく、人について書くこと」がいかに切実な問題関心であったのかがよく分かる[18]。

ただし、人について書くことも、人と出会うことも、決して簡単ではない。このことにつ

いて、本書と同じ頃に書かれた論考の中で鳥山氏は以下のように記している。

人ときちんと出会うことは、簡単なことではない。それは相手と対話し、関係を築き、自分自身にも向き合うことである。またそこには、自分が傷つけられるかもしれない、相手を傷つけてしまうかもしれない、また傷つけたことを相手に責められることも、相手を通して見えてくる自分の愚かさや間違いに対峙させられる可能性もつきまとう。それでも「違うからわからない」を超えて、先は見えなくともまずは相手に出会い、向き合ってみること。正解はわからないながら、まず関わってみること。こうした姿勢は誰かとともに生きていくために最も重要なものの一つではないかと思うのである。

[鳥山 2021: 22]

ここに記されたことは全て、本書を貫く問題意識と重なる。そして本書の記述を読むと、著者が彼女たちの希望、喜び、夢、後悔、不安、怒り、嫉妬をはじめとした感情に細やかに分入りながら、同時に、自身の感情に対してもきめ細やかな注意を払い続けていることは一目瞭然である。「人の民族誌」である本書は、「感情の民族誌」でもあるのだ。また、鳥山氏は「共感」が決して安易に到達できるものではないと率直に認めつつ[46-48]、自分の理解や期待との齟齬などを仔細に検討し続けている。その姿勢には、共感に至ることの困難を認識しつつ、しかしそれを安易に放棄しない粘り強さや、出会った人たちと誠実に向き合おう

*神戸大学大学院国際文化学研究科

とする様が顕著に示されている。

フィールドで出会った人と誠実に向き合おうとする著者の姿勢は、鳥山氏が圧倒され翻弄され続けた一人一人の生身の姿を学術研究の枠組みでは十全に捉えられないという認識にも現れている[372]。本書では、博士論文で用いた自己成形に関わる理論が割愛されているが[399]、研究者としてのその決断が困難なものであったろうことは想像に難くない。自分が出会った人の姿をできる限り自分の感覚に忠実に描こうと腹を括って、既存の枠組みに安住することなく、大幅な方針転換を決断した点は特筆に値する。

もっとも、鳥山氏は、先行研究や理論を完全に否定している訳では全くない。そのことは、鳥山氏に希望をもたらしたフェミニズムに始まり、中東を対象としたジェンダー研究の動向を丁寧にまとめながら自分の理論的立場を明らかにしている点[20-39]、カイロやエジプトに関する膨大な量の研究を渉猟したうえで、それらの議論を本書全般に丁寧に織り交ぜている点、さらにはオートナーによる「シリアス・ゲーム」を自身の事例をもとに批判しつつ、新たな理論的理解を提示した脚注などにも明確にみてとることができる[287、注180]。

本書の中では、A校で働く3名の女性教員と著者自身が主要な登場人物として出てくるが、学校という閉鎖的な空間の中で、著者を除くならば主要登場人物3名という限られた人物を対象としながら、驚くほど多角的な観点から2000年代初頭の大都市カイロに生きる人びとの姿が浮き彫りにされている。学校における教育を対象としながら、学校という場を超えた厚みのある議論を可能にしつつ、同時にエジプトにおける教育のもつ意味を多角的に検討することを可能にしているのが、す

で言及した著者のエジプト人の大家族の一員としての長年にわたる生活経験である。

だが、長い年月を過ごしたからといって、それだけで現地に関する深い理解が得られる訳ではもちろんない。たぐい稀な厚みのある研究が可能になったのは、人々に対する純粋な関心と、生活の細部に対する非常に細やかな観察眼を鳥山氏が有しているからである。人びとの会話、声や話のトーン、挨拶や激昂した時の身振りや仕草、料理、服装や小物、給料、室内の様子や調度品、化粧品、文房具を含めた日常生活品などの価格…。本文においても脚注においても枚挙にいとまが無いほど生活の細部への関心は記されている。

さらに、日々の生活の中に現れる細々としたものごと、会話、行為への飽くなき好奇心と観察は、グローバル消費主義の浸透や1970年代以降の都市生活の変容などと関連づけられながら、下層、中間層、上流中間層、上流層というエジプトとカイロを特徴づけている社会階層の特性を明瞭に示すこと、3名の女性たちが生きる生活の場の様相を明らかにすることにまで有効な形で展開されている。社会階層も趣味も考えも全く異なる3名の女性についての理解を深めるべく、エジプトでの生活経験とそこで得た知識と洞察を総動員して編まれた本書は、女性たちが生きるカイロの多面性をも見事に浮き彫りにしている。

本書は、カイロに生きる女性教員との「交感」を通じて、彼女たちのことを理解しようとする著者の格闘を記した傑出した民族誌である。それは同時に、私たちが現地で出会う人ときちんと向き合っているのか、誠実に問いかける一書でもある。長く残るこの民族誌が私たちにに向けて差し出されていることを心から言いたい。

参考文献

鳥山純子, 2021, 「なぜいま「フィールド経験」から語るのか: 一人の人間としてイスラーム・ジェンダーを生きるために」長沢栄治(監修)・鳥山純子(編)『フィールド経験からの語り』明石書店, pp.17-34.